

本で繋ぐ、明日へ繋ぐ

文 高田 郁
Takada Kaoru

画 浅妻健司

昭和四十年代、兵庫県宝塚市。

まだ舗装されていない道に水たまりができる、アメンボが泳ぐ。日照りの時はハンミョウが現れて道案内をしてくれる。そんな長閑な光景の一方で、宅地開発が進み、暮らしを支える個人商店が充実していた時代。自宅周辺には、五軒ほどの本屋があった。いずれも間口の狭い、こぢんまりとした店だった。

小学校から帰宅すると、ランドセルを放りだして、それらの本屋を一軒ずつ回った。児童書に力を入れている店もあれば、参考書や問題集の充実している店もある。どういう絡繰りか、他より一日早く雑誌が並ぶ店もあった。本屋ごとで棚の顔が異なるから、見ていて飽きることがない。

毎日訪れる「けったいな(奇妙な)子」を店番のひとつも面白がり、随分と可愛がってもらった。『パール街の少年たち』(モルナール・フェレンツ著)や『ぼくらははだしで』(後藤竜二著)等々、自力では辿り着けなかっただろう様々な本に出会わせてもらえた。そうやって巡りあえた本は、子どもの私を明日へ繋いでくれる存在だった。当時は、本のある暮らしも、本屋の在る街並みも、永遠に続くものだと思っていた。

「大阪の書店と取次とが、大阪ゆかりの作品を一冊選び、店や会社の垣根を越えて協力し合って売り伸ばし、その収益の一部で、社会福祉協議会を通じて大阪の子どもたちに本を贈る。OBOPとは、そうした取り組みです」

児童養護施設で暮らす子どもたちが読みたい本と、実際に施設に寄贈される本との間には、かなりの隔りがある。課題図書や心がぼかぼかする本を贈りたがる大人に対して、実際に子どもたちが欲するのは、お菓子作りやスポーツのルールブック、漫画、あるいは参考書だったり、最新版の図鑑だったりする。同じ本が何冊も並ぶのに、必要な本がないケースもある。受験を控えた子どもは、先輩から譲り受けたぼろぼろの問題集を使っているとのこと。

「必要な本を、必要としている子どもたちに届けたい。子どもたちの望む本をリクエストしてもらい、それを贈りたいのです。今回が第一回ですので、不手際もあるかと思いますが、宜しく願います」
そう言って、深く頭を下げる実行委員の姿に、何とも胸が一杯になった。

『銀二貫』は、親を喪い天涯孤独となった少年が、周囲の支えと自らの精進とで人生を切り拓いていく物語だ。低迷する出版業界の中で、本に携わるひとたちが、本で子どもたちの人生の役に立ちたい、と願う。取り組みの初回到拙著を選んでもらえたことが、ただただ嬉しく、ありがたかった。

だが、バブル期の地上げ、さらに阪神・淡路大震災によって、街の様相は一変。ほかに色々な事情があったのだろう、馴染んだ本屋の全てが消失してしまった。本のある暮らしそのものは変わらないのだが、恩人を失ったような喪失感は長く続いた。解放されたのは、五十代に差し掛かってからだだった。

不思議な廻り合わせで、四十半ばを過ぎて時代小説を書くよう決め、二〇〇八年にデビュー。翌年、『みをつくし料理帖』シリーズをスタートさせた。版元の営業マンと一緒に、生まれて初めて「書店回り」なるものをさせてもらうようになった。バックヤードにお邪魔し、書店員さんたちの働きぶりを目の当たりにすれば「ああ、あの頃の本屋のおじちゃんやおばちゃんも、こんな風だったのか」と感慨深い。書店回りを重ねるにつれて、新たに大事な友が増えていく思いがした。

二〇一三年、ひとつの知らせが飛び込んでくる。拙著『銀二貫』が、大阪ブックワンプロジェクト(通称OBOP)の第一回選定本に決まった、というのだ。「はて、OBOPとは何ぞや?」と、疑問符で頭が一杯の私に、OBOPの実行委員は次のように話した。

書店と取次の有志からなる実行委員会の会合は、終業後に集まって、二時間から三時間をかける。平素はライバル関係にあるはずが、「一冊でも多く売り伸ばすには、どうすべきか」と知恵を寄せ合う。店頭陳列や本に巻く帯のアイデアの捻出、ホームページの立ち上げ等々。それにサイン会や講演会のサポートなど、全て無給の手弁当だった。

一冊でも多くの本を、子どもたちに——そんな思いを胸に、一丸となって駆け抜けた日々だった。お陰様でおよそ半年間、『銀二貫』は大阪府下全書店と近隣エリアの書店で拡販され、結果、百四十八万円分の「子どもたちの望む本」の寄贈が叶った。ありがたいことに、OBOPの活動は以後も続き、今年で第九回となった。

本を巡る状況は年々厳しくなる一方だが、心をひとつにして、明日へと繋ぐこうとするひとたちが居る。その事実が、私を奮い立たせる。

たかだ・かおる 兵庫県宝塚市生まれ。中央大学法学部卒。1993年集英社レディスコミック誌「YOU」にて漫画原作者(筆名・川富士立夏)としてデビュー。2008年、小説家としてデビューする。著書に『みをつくし料理帖』『あきない世傳 金と銀』シリーズ、『あいー永遠に在り』『銀二貫』などがある。「本を読む楽しさを伝え、読書を暮らしの中に取り入れて身近なものにしたい」との思いから、2021年に「一般財団法人・高田郁文化財団」を設立。

